「襞のあわいに深く入り込んでいって…」をめぐって（7）

襞のあわい――その火口（ほくち）⑦

天理大学人間学部教授
松田　健三郎　*Kensaburo Matsuda*

「同じ」―― その意味することが一貫して問い尋ねられている。前稿では、その一局面がとりあげられた。ハイヌウェレの儀式を執行するニューギニアの人々と部漣島の人々とを、中沢新一は「同じように」ということばで繋ぶ。しかし、そこにはふたつの可能な方途があった。そのひとつは、「ニューギニアの人々」が「次々と交接を挑んでいく」ことと「部漣島の人々」が「観念のレヴェルに留めておくだけではなく、現実にも実行」することとのあいだ、いまひとつは、「ニューギニアの人々の社会を訪れた宣教師たちが…腰を抜かさんばかりに驚いた」ことと「部漣島の人々も…神父に深い苦悩を与える」こととのあいだである。引用した文章の脈絡から、後者であることが自明とされた。しかし、帰結はつぎにあった ―― であれば、この前者には「同じように」ではないという可能性もありうるということである。もとより、この前者とは、“ハイヌウェレ ―― 縄文時代中期作成の土偶 ―― 大宜津比売神・保食神 ―― お影さま”という「聖性をめぐる最良の野生の表現」の系列の一部をなす。したがって、先の脈絡とは、別の意味で「同じように」なのでなければならない。

あまりにもって廻った言い回しを弄しつづけているのだろうか。しかし、なんとか問い質したく念じているのは、ほかでもない、「同じ」はかならずしも同じではないのではないか、ならば、そこにみえるもの、みなければならないものは…、ということなのである。

インドネシアのモルッカ諸島セラム島の先住民ウェマーレ族のもとで採取した神話を、イエンゼンは「ハイヌウェレ型神話」と名づけたことは幾度も言及してきた。「…型…」といわれるのは、それが典型であるからにほかならない。その型に含まれるさらなるものとして、吉田敦彦は、ニューギニア中央部の先住民マリンド・アニム族における「マヨ娘と呼ばれる若い娘を生贄にする」凄惨な儀礼を紹介した。このさらなる紹介の意味は、「繰り返されねばならぬ」の意味の確認にある。

> 古栽培民の信仰によればこのように、太古に行われた殺害によって人間は、それから生じた作物を栽培し、それを食べて生きて行けるようになった。だがそれによって人間は、作物を生じさせるためにハイヌウェレを殺す。そして、その作物を食べることでハイヌウェレを食べねばならね、運命を持つことになったのだ。

この「運命」の意味することについて、吉田のことばはつづいた。長くはなるが、あらためての確認のために…、

> いろんなもののあいだの区別が曖昧で、混沌のようであった原古の状態に…終止符が打たれた。そしてその結果、人間もはじめて、文化を持ちかつ死を不可避の運命として定められて、現にそうであるような人間になった。またそれとともに世界にもはじめて、いろいろなものの区別が定まり、現在あるような秩序が定められている。起源が説明されているのは、明らかにただ作物としての芋だけではない。この話はさらに、文化の起源、死の起源、そしてまた人間の起源と、世界そのものの起源まで説明した、本当にどんな言葉でも言い尽くせぬほど実に重要な意味を持つ神話なのであるわけだ。

“作物の起源 → 死の起源 → 人間の起源 → 世界そのものの起源”―― この起源の、さらなる起源への遡源 ―― それがハイヌウェレ型神話の物語るものであるというのであった。からなずしも他の同じと同じではない「同じ」―― ハイヌウェレから始まりお影さまへとつらなる系列におけるそれは、そこにこの起源への遡源をのぞかせるものにほかならない。この淵を、このようにのぞくものになにがみえてくるというのであろうか。

さて、この起源への神話的遡源についてであるが、その意味するところに錘鉛を降ろす興味深い論考がある。シカゴ大学のウェンディ・ドニジャーは、とある小著にみずから序文を付して、つぎのように述べている。

> 神話はすべて、自然が与える混沌たる事実に知的意味を与えようとする弁証法の試みである…、またこの試みは、不可避的に人間の想像力を二項対立の網にとらえてしまう…。*

これが、だれの神話についての洞察を解説してのものか ―― ここに、ことあらためて問う必要もなかろう。その者について、ことばはつづく。

> 実のところ彼は、神話とは、解決できないパラドクスを解決しようとする執念とも言える欲求によって駆り立てられているのだということをわれわれに教えてくれた人なのである。しかし、私は、彼は人間の両面性を明らかにした人と考える。レヴィ－ストロースにとってパラドクスは、エイハブ船長のクジラなのだ。**

エイハブ船長のクジラ ―― モービー・ディックは、しばしば悪の象徴、他方、執拗にまで追いその捕獲、いや抹殺に執念するエイハブ船長は善の象徴とみなされてきた。しかし、このクジラ ―― モービー・ディックは白鯨、白きクジラなのである。もとより、そのことのみに所以してではなかろうが、サマーセット・モームは大自然を奔放に駆け抜ける白きクジラを善の象徴、一方、蛇蝎のごとき執念の権化と化するエイハブ船長を悪の象徴とみる。そのいずれを真実とすべきか？

> 銛は投射され、刺された鯨は疾飛し、索は火がついたように溝を走り ―― 縺れてしまった。エイハブは屈んで、それを直そうとした。…だが、飛ぶ索の輪が彼の首に巻きつき、彼は…短艇から吹き飛ばされた…。***

そして、

> このとき小さな海鳥のむれが、まだ口を開いている深淵のうえを、叫びながら飛び回っていた。深淵の険しい側面には悲しげな白波が打ちつけた。それからすべては崩れ、海の大きな屍衣は、五千年前にうねったと同じようにうねった。****

深淵に飲み込まれたエイハブ船長、そしてモービー・ディック ―― その最後についてはなにも綴られてはいない。ただ、五千年前同様にうねる屍衣としての海があるばかりである。屍衣のしたには、善と悪の記号論的両義性をうかがうべきなのか。この脈絡に、ドニジャーのいう「両面性」としての、レヴィ-ストロースのパラドクスはある。そして、一貫して問い尋ねられている「同じ」も…。

* レヴィ-ストロース『神話と意味』、みすず書房、1999、P.ii。
** 同 P.vi。
*** メルヴィル ,H.『白鯨』（『世界文学全集 7』河出書房 1956 所収）P.418,9。
**** 同 P.419。